

第9回 皮膚縫合

はじめに

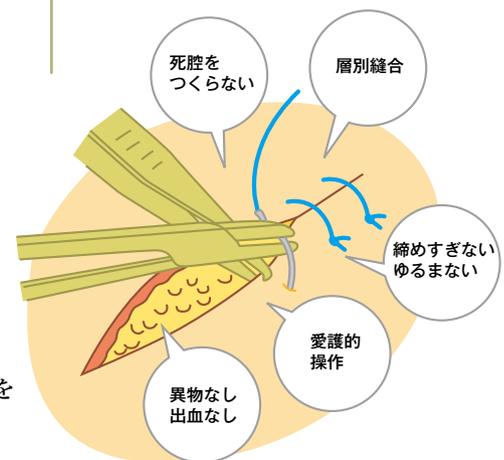
治癒は自然の力、縫合はあくまでそれを補助する手段

生体は損傷に対し、自然に治癒する力がある。しかし創内に異物や死腔があると治癒過程は障害される。また、局所の血流が乏しい場合も同様である。自然治癒力を促進するために、組織を接合し、治癒しやすい環境を整えてやるのが縫合操作である。

そのために注意すべきことは以下のとおりである。

1. 適切な縫合針、縫合糸の選択
2. 十分な止血、異物除去
3. 常に愛護的な操作
4. 層別縫合
5. 死腔のないように
6. テンションフリー
7. 血流への配慮

縫合は創傷処理の基本手技であり、配慮の足りない縫合は、かえって自然治癒を遅らせ、醜形を残すことにもなりかねない。



必要な器材* 1



* 1 縫合セットとして用意されている場合が多い。

持針器

ヘガール型（左）とマチュー型（右）がある。通常、大きな縫合ではマチュー型が用いられ、細かい縫合にはヘガール型が用いられる。

①持針器**②鑷子（せっし、ピンセット）**

先端に鉤がついて把持がしっかりできる有鉤鑷子と付いていない無鉤鑷子がある。また、先端が細いアドソン鑷子（無鉤と有鉤がある）も真皮縫合などでは有用である。



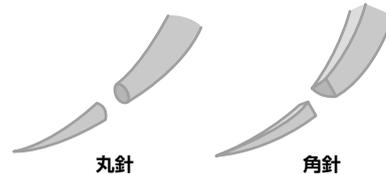
アドソン鑷子

③鋏

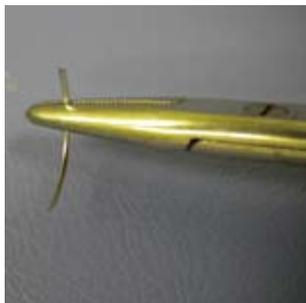
糸切りとして使用する。

④縫合針**(1) 角針, 丸針**

皮膚縫合はほとんど角針を用いる。丸針よりも切れがよい。

**(2) 弾機針と無傷針**

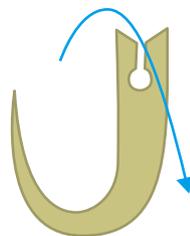
針の根元は糸を通しやすい構造になっている（弾機針）が、いちいち糸を通す手間を省くのと、組織を貫通する際の損傷を防ぐため、針つき糸（無傷針）もある。



弾機針



弾機針に糸をつけたところ



弾機針の構造

矢印のように糸を通す。



無傷針

無傷針は太さが一様で、組織に傷がつきにくい。

